

照山元瑤筆「観音図」に関する考察

中村 玲

はじめに

本稿では、学問や詩歌等に深い造詣を示し、江戸時代前期を代表する文化人として名高い後水尾院（一五九六―一六八〇、在位一六一―二九）の八番目の皇女であり、数多くの絵画を残した照山元瑤（光子内親王。林丘寺宮などとも。京都・林丘寺門跡の開山。一六三四―一七二七）の制作の一端を、元瑤が最も多く描いた「観音図」を通して検討する¹。元瑤はさまざまな構図の「観音図」を制作したが、とりわけ両手を腹前に組み、雲上に立って来迎する姿で描かれる「観音図」に着目する。

元瑤筆のこのような構図の「観音図」の中で、パトリシア・フィスター氏は、黒地の絹本に銀白色の絵具を主として描かれ、中国唐代の画家・呉道子（六九八頃―七五八頃）の作品を手本にしたという書付のある元瑤筆《観音像》（林丘寺蔵、一七一―一八世紀）（図1）を先行作品として紹介されている²。呉道子による「観音図」は、狩野探幽（一六〇二―一七四）筆《探幽縮図》（京都国立博物館蔵）に同様の姿形が描かれ、さらに元瑤と関連の深い黄檗宗萬福寺にも拓本が伝来しており、当時の日本で流布していたことを述べられたうえで、元瑤もまたそれらの中の

一例を手にして忠実に写した可能性を指摘されている。そして、元瑤はこの「観音図」の構図を特に好み、同種の作例を多く描き、各地の寺院に寄贈したと論じられている⁴。

加えて、承応三年（一六五四）隠元隆琦（一五九二―一六七三）らとともに渡来した黄檗僧で、多くの書画を残した萬福寺第四世・独湛性瑩（二六二八―一七〇六）による同様の《白衣観音像》（個人蔵）等も現存することから⁵、やはりこの種の「観音図」は父・後水尾院が帰依し、元瑤も幼い頃より帰依した黄檗宗に影響を受けたものとも考えられよう。

元瑤筆の同種の「観音図」は絹本墨画であり、大きな頭光を伴うことが特徴の一つといえ、衣文線の数や宝冠の形などにも差異はあるものの林丘寺伝来の《観音像》をおおむね継承するものと認められ、フィスター氏の指摘は大いに首肯できる。しかし、林丘寺伝来の《観音像》を継承する各々の「観音図」の細部を確認することや、賛、作品に伴う史料、制作時期やその背景、落款の特徴などを分析することについては検討の余地があるだろう。

そこで本稿では、元瑤によるこれらの「観音図」の実見調査を踏まえ、二〇一九年、二五九年ぶりに公開された《白衣観音図》（京都・清水寺蔵。以下、清水寺本）のほか、卓峰道秀（一六五二―一七一四）筆

《十六羅漢図》を左右幅とした三幅対のうち、中幅の《観音図》（東京・祥雲寺蔵。以下、祥雲寺本）、元瑤の自賛を伴う《観音図》（神奈川・遊行寺宝物館蔵。以下、遊行寺本）、近衛基熙（一六四八—一七二二）賛《白衣観音図》（滋賀・浄光寺蔵。以下、浄光寺本）の四点の考察により、現時点までに判明したことについて報告を行うものとする。

一 「観音図」の図样的特徴

本稿で考察対象とする四点の「観音図」は、細部に若干の差異はあるものの図様はほぼ共通するため、その特徴を述べる。材質はいずれも絹本墨画、画面向かって左向きに、大きな頭光を伴い、雲上に立つ白衣観音が墨のみで描かれている。観音は左手を上、右手を下に組み、中指と薬指を曲げた形をとる。左手は手の甲を上、右手は掌を上にする。

なお、観音の顔貌や体軀、衣文線、装飾品、雲などの細部に至るまで、これらが描かれた墨線には薄墨で隈を入れているのが特徴的である。

各々の部分を見ていくと、顔の輪郭は丸顔またはやや面長であり、眉は細めにくつきりと描き、眉頭から眉尻に向かって若干太く表されている。眉間の上には、白毫が描かれる。目はやや下向きに視線を投げているかのようであり、切れ長の左目は上瞼をくぼませ、下を見ていることをより強調させている。黒目は瞳孔を濃墨で表し、その周りを薄墨で塗り分け、白目の目頭と目尻にも薄墨を入れる。右目は顔の輪郭に隙間を開け、そこに目尻の内側から黒目と目頭が描かれる。鼻梁線の下には二本の縦筋が引かれ、閉じた口は、両端を太めに締めた横方向の墨線と薄墨による上下の唇の輪郭線で表される。口の下には山なりの皴を一本描き、顎の下には三本の皴を入れる。左耳は大きく描かれ、耳朶の線も引

かれる（図2）。

頭髪は結び上げており、額に近い部分や結び上げた周囲、左耳の傍の生え際は細い墨線により一本一本描かれ、その上に薄墨を施し、他は濃墨を塗っている（図2）。頭の前面には、中央に化仏のある宝冠を着ける。化仏は宝珠光の線が引かれた光背を伴い、鬘を結び、眉や目鼻の線も見られる。蓮台に乗り、やや前かがみに下を向くように表される。化仏の周囲にも、蓮の花や雲形のような飾りをあしらう（図3）。頭光は少しずつ線を繋げながら円を描き、そのまわりに薄墨を刷いている（図4）。

観音は頭部、顔貌、胸元、手足の先のみを見せ、その他は白衣で覆われている。衣文線の数は多く肥瘦を伴い、両手の裾や腹部の内側は太め、足下に近い部分は細めなどと描き分けている。足下の裾は翻っている（図5）。

胸元には、蓮の花と雲のような形状を複数の玉で繋いだ胸飾を付ける（図6）。左手首には、二つの腕釧が見られる（図7）。衣の膝下辺りから、両足の間と左足の後方に、蓮の花や葉、玉で飾られた二本の瓔珞が垂下する（図5）。

両手の指は長く、関節や手相まで描き込んでいる。爪が大きく、長いのも印象的である（図7）。両足は、わずかに足首を見せる。右足の甲が高く、甲の輪郭線から親指まで一気に繋げて描かれる。また、右足裏の親指の関節、左足の外くるぶしなども表す。手指と同様に足指は長く、爪も大きくて長い（図5）。

観音を乗せた雲は渦を巻き、厚みをもってふわりと表現され、向かって右側はたなびいている（図5）。以上が清水寺本、祥雲寺本、遊行寺本、浄光寺本の図样的特徴である。

二一 一 《白衣観音図》京都・清水寺蔵

ここからは、各々の「観音図」について論じる。《白衣観音図》(清水寺本)(図8)が伝来する清水寺は、京都市東山区の北法相宗の総本山。山号は音羽山。西国三十三所の一六番の札所。宝亀九年(七七八)開創、開山は法相宗の僧侶・延鎮(生没年不詳)。本尊は十一面観音立像で、観音信仰により栄えたことでも知られる。

清水寺本の法量は、一・二八・七×五六・〇cm。署名は「林丘寺照山謹畫」、印章は「元瑤之印」白文方印(約二・三×二・二cm)の一顆である(図9)。

本図には共箱があり、箱蓋表に「観音像林丘寺宮御筆 清水寺成就院不出」、箱蓋裏に「元禄拾四^{辛巳}年正月吉祥日 壽清上人奉納之」、箱の身の内側に「観音像 林丘寺宮御筆 清水寺成就院壽清」という書付が残る(図10)。これらの書付から、清水寺本は元瑤が描いたもので、清水寺の僧房の一つである成就院より不出であったこと、元禄一四年(一七〇一)一月吉祥日に、成就院第一四世の壽清上人(一六六一—一七〇八)が同院へ奉納したものであることが判明する。元禄一四年一月という記述から、清水寺本は元瑤六七歳頃の制作であり、当時、壽清上人は四〇歳頃であったことも知られる。

壽清上人は、清水寺本を奉納する三年四ヶ月ほど前の元禄一〇年(一六九七)八月二日に成就院へ入り、同一七日(二一日とも)に本願に補任された。同年十一月一五日に継目御礼の参府を行い、翌年(一六九八)五月五日に上人号を勅許されている。

成就院の役人により、清水寺や成就院の公用記録が代々書き継がれた『成就院日記』の元禄一四年の項には清水寺本に関する記載はない。し

かし、それから五九年後の宝暦一〇年(一七六〇)三月三日から四月三日まで、清水寺内で行われた御開帳の際に本図が出品されたことが『成就院日記』同年四月二五日の条に記されており、少なくともこの年には同寺に伝来していたことが明らかである⁸。また、西国三十三所の草創一三〇〇年記念事業の一環で、宝暦一〇年以来二五九年ぶりに、二〇一九年四月二八日から五月六日まで、清水寺の経堂にて一般公開がなされた⁹。

清水寺本の伝来については、同寺の観音信仰との関連がまず考えられる。このほか、清水寺や成就院、同寺の塔頭・泰産寺は、元瑤に縁の深い黄檗宗とも関連があり、独湛性瑩ら黄檗僧による書なども伝来する¹⁰。また、後水尾院の第一六皇子で元瑤の異母弟であり、清水寺や奈良・興福寺の別当を務め、黄檗僧とも交流した一乘院宮真敬法親王(一六四九—一七〇六)をはじめとする皇室との縁もある。これらを背景として、清水寺本が元瑤から壽清上人へ下賜され、壽清上人が成就院へ奉納し、現在まで什宝として伝来するものと現時点では考えられる。

元瑤の絵画は制作年が明らかでないが、清水寺本は元禄一四年一月頃に描かれたことが推察され、管見の限りこの種の「観音図」の最も早い作例となる。これらの祖型と考えられる『観音像』(林丘寺蔵)(図1)は元禄一四年一月以前に制作されたことも判明するため、清水寺本の存在はきわめて貴重といえる。

二一 二 《観音図》東京・祥雲寺蔵

《観音図》(祥雲寺本)¹¹(図11中央)が伝来する祥雲寺は、東京都渋谷区広尾に所在する臨済宗大徳寺派の寺院。山号は瑞泉山。開基は筑前福

岡城主・黒田忠之（一六〇二―一五五四）で、元和九年（一六二二）、赤坂溜池の忠之の屋敷内に建立。開山は石州（現在の島根県）出身で、大徳寺第一六四世を務めた竜岳宗劉（一五五七―一六二八）。竜岳は、大徳寺第一四二世で、同寺玉林院の開山・月岑宗印（一五六〇―一六二二）の嗣法であり、寛永三年（一六二六）後水尾院から竺山大法禪師の徽号を賜った。寛永六年（一六二九）八月に麻布台（現在の港区六本木）に、寛文八年（一六六八）の江戸大火により現在の地に移転。江戸時代には六〇八もの塔頭を有した巨刹で、大徳寺派の触頭であり独礼の寺格であった。

祥雲寺本の法量は、一・二一・一×五三・六cm。署名はなく印章のみであり、「庄頼」朱文入隅長方印・中に昇り龍降り龍（約三・七×一・七cm）、「元瑤之印」白文方印（約二・三×二・二cm）の二顆が捺される（図12）。本図にもまた、箱蓋裏に重要な書付がある（図13）。

中央 後水尾之皇女林丘寺光子内親王御筆

左右 洛北隠士釋卓峯圖之

此乃 皇女圖畫之師範也

寶永第三戌年中央之圖成同第七

庚寅年左右之圖成

先述のとおり、祥雲寺本は卓峰道秀筆《十六羅漢図》双幅とともに三幅を成すが、この書付から、中幅の祥雲寺本が宝永三年（一七〇六）元瑤七三歳、左右幅が同七年、卓峰五九歳の頃の制作と知られる。さらに、この書付は卓峰が元瑤の絵の師であったことが現在唯一知られる史料である。

卓峰は、西本願寺絵所の徳力家三代・善雪（一五九九―一六八〇）の嫡男で、寛文一〇年（一六七〇）頃、後に萬福寺第五世となる高泉性激

（一六三三―一九五）の弟子となった。絵画は父に師事し、狩野派からも学んだとされ、的確な描写力で延宝五年（一六七七）《三十三観音図》（東京国立博物館蔵）等の優れた仏画制作を行った。元瑤と卓峰の師承関係については、両者の《三十三観音図》が明兆（一三五二―一四三一）の同図における図様を踏まえる点、卓峰の同図は後水尾院の寄進で表装、彼が二代住持を務めた京都・仏国寺に納められ、後水尾院と黄檗宗の深い関わりにより、元瑤が彼と面識を得て絵画指導を受けた可能性がある¹²が指摘されている。

祥雲寺本および卓峰筆《十六羅漢図》は、文政十一年（一八二八）『寺社書上』や『御府内寺社備考』の祥雲寺の項には掲載されていない。しかし、恐らくは祥雲寺が後水尾院や元瑤に縁の深い臨濟宗の寺院であることが伝来に関与するものと思われる。祥雲寺本制作の四年後、元瑤の師・卓峰が左右幅を描き添えた背景も大変興味深く、伝来の経緯に関する考察も含めて今後の課題である。

二一三 自賛《観音図》神奈川・遊行寺宝物館蔵

続いて、元瑤自賛の《観音図》（遊行寺本）である（図14）。¹³本図が伝来する遊行寺は、神奈川県藤沢市西富に位置する時宗の総本山・清浄光寺の通称。山号は藤澤山。時宗の開祖・一遍上人（一二三九―八九）が諸国遊行の際、ここを念仏道場としたことに由来。この寺院の住職は、諸国に念仏を広めるために遊行し「遊行上人」と呼ばれるため、この通称がある。開山は俣野（現在の藤沢市・横浜市周辺）の地頭・俣野氏の出身である他阿呑海（一二六五―一三二七）で、その兄で開基の俣野五郎景平の寄進で正中二年（一三二五）に創建。將軍家や戦国武将の外護

を受けたことでも知られる。

遊行寺本の法量は、一四二・〇×五六・〇cm。署名は「林丘寺照山」、印章は「庄頼」朱文入隅長方印・中に昇り龍降り龍（約三・七×一・七cm）、「元瑤之印」白文方印（約二・三×二・二cm）であり、祥雲寺本に捺された二顆と同一である（図15）。

遊行寺本の上部には元瑤の自賛「具一切功德 慈眼視衆生 福聚海無量 是故應頂禮」が付される。この自賛に、関防印「鴨川東」朱文長方印（約二・一×一・三cm）と、「照山」朱文方印（約二・四×二・四cm）の二顆が捺される（図16）。

賛「具一切功德 慈眼視衆生 福聚海無量 是故應頂禮」は「法華経 普門品第二五（観音経）」の一節である。元瑤はこの賛文が含まれる「法華経」を多く書写しており、それらは父・後水尾院や元瑤に関連した寺院に伝来している。

さて、遊行寺本の制作年や来歴を示す可能性のある史料が現存する。宝永六年（一七〇九）一〇月（跋は十二月）、元瑤の存命中に執筆された伝記史料『林丘寺宮法内親王行業記』（宮内庁書陵部蔵）の著者と同じ、木村氏明山藤貞（跋では守拙齋明山貞、一六三三―？）が延宝元年（一六七三）一月一五日から正徳二年（一七一二）二月までの三九年間の出来事を著した『竹隱文藁』（福岡大学図書館蔵）¹⁴である。元瑤や林丘寺に関する事項が多く記された一次史料と見なされ、著者に関する考察を含めて別稿にて史料翻刻を行う予定であるが、この『竹隱文藁』の「書 林丘寺宮所畫大悲像表具裏」という項目に着目する。

長公主光子内親王 法諱照山元瑤 尊尼創於林丘寺棲遲矣 後水尾院之皇女也 性妙于書畫嘗畫觀音大士像 世以稱之雲妙野衲思之久矣 一旦辱畫一補之大悲像自賛以賜之 我願頓足於是崇斯尊備遊行

悠久之寶器 普欲令國土之群生結淨業之正因者也 冀後世之行者莫

空我願矣 仍便為後忘聊記其事如斯

皆宝永三年丙戌歲三月下韓^マ 應遊行上人雷代書

この記述によると、元瑤が一幅の「大悲像（観音図）」を描き、自賛を付して遊行上人に下賜したとされる。文末の宝永三年（一七〇六）三月下旬当時の遊行上人は、時宗遊行派第四七代・唯称上人（一六五〇―一七〇八、在位一七〇三―一七〇八）¹⁵であり、唯称上人の求めに応じて「観音図」の表具裏に守拙齋が代筆したものと捉えられる。元瑤より自賛の「観音図」を下賜された唯称上人が、遊行の永久にわたる大切な宝としてこれを備え、一切衆生に念仏の正しい縁を結ばせたいとされ、元瑤が描いた「観音図」に対する崇拜の念が記されている。この元瑤自賛の「観音図」が遊行寺本に相当し、唯称上人の願いが継承されて、本図が現在まで遊行寺宝物館に伝来してきた蓋然性もあろう。

宝永三年は、正徳元年（一七一）正月を上限とする、遊行上人の廻国の様子を記した『遊行日鑑』、享保二年（一七一七）を上限とする京都滞在中の公用日記『遊行・在京日鑑』、享保八年（一七二三）を上限とする遊行寺の日記『藤沢山日鑑』のいずれにも該当せず、これらの史料から遊行寺本に関する記述を見出すことはできない。しかし、唯称上人は宝永元年（一七〇四）に廻国を始め、同二年九月一日に京都・七条道場に入り越年、参内し、同三年七月に東山天皇（一六七五―一七一〇）より「宗祖絵詞伝一〇巻」を新たに写すことを勅賜されている。¹⁶

尾張藩士・天野信景（一六六三―一七三三）による随筆集『塩尻』巻二四によれば、内裏に時折召されたとも示され、¹⁷宝永三年三月下旬当時京都におり、元瑤による「観音図」を下賜されたとも推察される。

また、遊行寺宝物館には、後水尾院から第八皇子・後西院（一六三八

一八五、元瑤の同母弟)へ『古今和歌集』が伝授された際の儀式の神壇を描いた《古今伝授神壇図》(写本、江戸時代)や、元禄二年(一六八九)十一月十九日、第四三代・尊真上人の際の《東山天皇繪旨》も伝来するため、これらの縁で遊行寺本が下賜された可能性もある。

遊行寺本の表装は新たなものに替えられており、付属品等も現存せず、宝永三年三月下旬当時の記述は見られない。唯称上人が元瑤より下賜された「大悲像(観音図)」が遊行寺本と同一であれば、遊行寺本は宝永三年三月下旬、元瑤七三歳頃に制作されたといえる。当年は、同種の「観音図」である祥雲寺本の制作年と同じである。

ここで、遊行寺本の賛と、後水尾院の二五回忌に書写、奉納された、宝永元年八月《法華経普門品第二五》(滋賀・正明寺蔵)(図17)や、母・逢春門院の二五回忌に書写、奉納された宝永六年(一七〇九)五月《法華経普門品》(滋賀・地安寺蔵)(図18)という、来歴が確かな宝永期の作例の筆跡を比較したい。賛は比較的余裕のあるスペースに付され、恐らくは他者から見られることを意識して書かれる一方、写経はわずかなスペースのみであり、修行などのより個人的な行いであるため、両者で条件は異なるだろう。しかし、結論から言えば、両者の筆跡は全体的によく似ている。

文字数が多いため、「具一切功德 慈眼視衆生」のみで比較しても、「具」の一画目から六画目までの形や、二画目の縦線が六画目を突き抜ける点、「一」が右上がりである点、「切」の刀部の形、「功」の一画目と三画目の傾き、「徳」の四、五画目の形、特に五画目をやや左に払う点などが共通する。また、「慈」の心部の形、「眼」の目偏や旁の形、「視」の示偏の二画目の折れを扁平気味にする点や旁の形、「衆」の六画目が三画目の縦線の右を超えない点、「生」の全体の形やバランスな

ど、細かい書き癖と思われる点まで近似する。以上の特徴から、この賛は元瑤の真筆と考えられる。同じ宝永期の作例の筆跡と共通することからも、遊行寺本が宝永三年に描かれたとしても齟齬のないものと思われる。宝永三年三月下旬に遊行寺本が制作された可能性は、元瑤の画業を辿るうえでも大いに有益な情報となるだろう。

二一四 《白衣観音図》 滋賀・浄光寺蔵

《白衣観音図》(浄光寺本)(図19)が伝来する浄光寺は、滋賀県蒲生郡日野町河原に所在する黄檗宗の寺院。山号は医王山。創建は室町時代初期とされ、当時は天台宗に属して法界寺と号した。応永期(一三九四—一四二八)に武将・蒲生氏により安置された薬師如来を本尊とし、疫病退散の加持祈祷が修法された。一方、開基は行基(六六八—七四九)で、当時は段曲寺と呼ばれ真言宗であったとも伝える。天正期(一五七三—一九二)の兵火で衰微していたが、延宝三年(一六七五)に寺号を浄光寺と改め、元禄七年(一六九四)滋賀における黄檗宗の中心的寺院で、後水尾院の勅願で再建された正明寺の第三世・晦翁宝高(一六三五—一七二二)が中興開山となった。宝永四年(一七〇七)、晦翁は浄光寺の規文を改め、翌年に正明寺を去り浄光寺に退隠し、後水尾院を祀った。

晦翁は後水尾院の恩寵が厚く、その子女にも信任を得て、彼らから下賜された什宝も数多く伝来している。元瑤によるものは浄光寺本と《後水尾法皇像》¹⁸が現存し、元瑤の自画像や「如意輪観音画像」も旧蔵していた。¹⁹

浄光寺本の法量は、一三一・二×五四・九cm。署名は「林丘寺照山元

「瑤」、印章は「庄穎」朱文入隅長方印・中に昇り龍降り龍（約三・七×一・七cm）、「元瑤之印」白文方印（約二・三×二・二cm）の二顆が捺され（図20）、祥雲寺本および遊行寺本の落款部分の印章と同一である。裏書は「円通大士林丘宮」筆¹⁹。

上部には、賛「補陀巖上人現身 三十二同我 涉東溟不離三摩地 以一山國師舊贊書」が左右に分かれて付されている。続いて「悠見子（花押）」という署名が残る（図21）。賛は、鎌倉時代後期の臨済宗の僧で、中国・元より来日した一山一寧（一二四七—一三二七）の語録（巻下）における「賛仏祖」収載の「観音大士」の一部であり、「以一山國師舊贊書」の証左となっている。

署名の「悠見子」は、近衛家第二〇代・近衛基熙（一六四八—一七二二）の号である（悠見とも）。基熙は、同家第一九代で関白を務めた尚嗣（一六二二—一五三三）の子で、延宝五年（一六七七）左大臣、元禄三年（一六九〇）関白、宝永六年（一七〇九）太政大臣となった。享保七年（一七二二）に出家、応円満院悠山証岳と号した。寛文五年（一六六五）から宝永四年（一七〇七）までが伝存する自筆日記『基熙公記』も残している。

基熙は、後水尾院の第三皇女・昭子内親王（一六二五—一五一、母は東福門院）を母（養母）とし、第一五皇女・常子内親王（一六四二—一七〇二、母は新広義門院）を妻としており、元瑤にとって近い関係にあった。父・尚嗣が早くに没したため、外祖父・後水尾院の命で幼少期に近衛家を継いで以来、後水尾院の庇護養育を受け、歌道をはじめ諸学において大きな影響を受けたとされている²¹。

また、黄檗宗との縁も深く、万治二年（一六五九）一月、大納言・鳥丸資慶（一六二二—一七〇）とともに摂津富田の普門寺（現在の大阪府高

槻市）に隠元隆琦を訪ね、偈を贈られた。翌年、隠元が近衛家の所領・大和田に新たな寺院の建立の地を望むにあたり、幕府はこの地を収公して、近衛家は摂津池田（大阪府池田市）に替地となり、隠元に大和田の地が寄進された。翌寛文元年（一六六一）二月、隠元は基熙に偈を贈った。同年の五月に萬福寺は開創し、閏八月に隠元が住職となると、同寺と近衛家はより親しくなり、住持就任の際にあたり、代僧が挨拶を行うなどした。延宝五年（一六七七）九月に基熙が同寺を訪ねた際、当時の住持・木庵性瑫（一六一一—一八四）より七言八句を贈られ、元禄八年（一六九五）二月に子の家熙とともに訪ねた際には、高泉性激に入道の工夫を問うなどしている²²。

これまで浄光寺本の紹介はなされてきたが、悠見子（近衛基熙）による着賛については深く言及されてこなかった。賛と署名に再び注目すると、すべての使用文字と同字の基熙の書を見つけることは今後の課題であるが、例えば「補」の字の衣偏は、寛文十一年（一六七二）から延宝五年（一六七七）までに書かれた《和歌懷紙（初春見鶴）》（陽明文庫蔵）での「初」の字の衣偏と形が近似している。「人」、「不」、「以」や「二」は、『基熙公記』延宝七年（一六七九）六月二十六日の記事の同字などによく似ている。「三」や「同」、「書」は、錦小路頼庸筆、宝永三年（一七二八）二月八日基熙賛《近衛基熙像》（陽明文庫蔵）に、「二」や「國」は土佐光起筆、基熙が詞書の一部を担当した元禄三年（一六九〇）《大寺縁起》（開口神社蔵）²⁷に、「上」や「山」は宝永元年（一七〇四）から同六年（一七〇九）基熙筆、狩野常信画《瀟湘八景図色紙帖》（陽明文庫蔵）²⁸に、「悠」、「見」は《近衛基熙書状》（一般文書目録番号…一九二九一、三〇一八—三三）や元禄三年（一六九〇）《千類集》（いずれも陽明文庫蔵）奥書などに見られるものと形が類似している。花押は《伊勢物

語抄》(ハーバード大学付属フォッグ美術館蔵)³⁰に残るものなどと比べると、やや慎重に記している(図22)。

現時点ですべての使用文字と他の作例の同字との比較はできかねるが、これまで述べたように筆跡が近い例が多く、元瑤との関係からも、浄光寺本の賛と署名は近衛基熙によるものと見なすことができる。

『基熙公記』において浄光寺本の着賛に関する記事は、今のところ見つかっていない。『近江蒲生郡志』の浄光寺の項には、「延宝六年(一六七八)左大臣近衛家(つとむ)熙奏して勅願所とす」とある。³¹延宝六年(一六七八)当時の左大臣は基熙で、彼が浄光寺を勅願所としたと伝えており、元瑤との縁に加え、このような理由で浄光寺本に揮毫した可能性も考えられよう。

浄光寺本の制作年に関する明らかな史料は確認できていないが、祥雲寺本および遊行寺本の落款部分と同一の印章であることや、後述するようにならぬ特徴からも、制作時期は元禄一四年一月(清水寺本)より下り、宝永三年(祥雲寺本、遊行寺本)により近い時期の制作であることが窺える。

三 作例間の比較検討

最後に、四点の作例間について検討を行う。まず図様について、最も初期の作例である清水寺本は、後に制作されたと見なされる祥雲寺本、遊行寺本、浄光寺本の三点とやや異なる部分認められる。線に注目すると、清水寺本は衣文線が全体的に太めで強く引かれている。加えて、線質はやや硬く、より慎重で、肥瘦を意識するあまり擦れや途切れも見られる(図23)。唇の間の線、左手の指の付け根などには打ち込みも確

認できる。薄墨による隈も、全体として他の三点よりも濃いめに入れられている。

他の三点についても、遊行寺本と浄光寺本はより滑らかな線であるのに対し、祥雲寺本は擦れる部分があるなどの違いはあるものの、例えば鼻梁線がより自然な形で描かれること、上瞼の線が濃く入れられること、装飾品等の表現など、三点は総じて描き慣れた様子が窺える。さらに、清水寺本のみ胸飾の形が異なる点も目に留まる(図6)(図23)。

これらの特徴から、清水寺本が描かれた元禄一四年一月当時、元瑤は同種の「観音図」を描くにあたり模索の段階にあつたものと考えられる。元禄一四年一月から宝永三年までの五年間、同種の「観音図」が他にも数多く制作されたものと推察され、四点を見る限りではあるが、徐々に筆の運びや細部の表現などを確立させ、自身の描き方を定着させていったと見受けられる。

署名と印章を確認すると、署名については清水寺本が「林丘寺照山謹畫」(図9)、祥雲寺本が無記、遊行寺本が「林丘寺照山」(図15)、浄光寺本が「林丘寺照山元瑤」(図20)である。清水寺本の「林丘寺照山謹畫」について、「謹書」とあるものは延宝七年(一六七九)八月《法華經》(京都・雲龍院蔵)、一七一―一八世紀制作《弥勒菩薩像》(金剛峯寺蔵)等があるが、「謹書」は管見の限りこの作例のみで使用されており、珍しい。遊行寺本の「林丘寺照山」は、元禄二年(一六八九)奉納《観音菩薩騎龍図》、一七一―一八世紀制作《南無観世音菩薩名号》(いずれも地安寺蔵)、宝永二年(一七〇五)一〇月奉納《自画像(照山元瑤尼像)》(正明寺蔵)等にも見られる。浄光寺本の「林丘寺照山元瑤」は、前出の宝永元年(一七〇四)八月《法華經普門品第二五》(正明寺蔵)(図24)、宝永六年(一七〇九)五月《法華經普門品》(地安寺蔵)

(図25)等に用いられる。

三点の署名は全体として丁寧に記され、各々の形も類似する。共通する文字の筆跡を見ていくと、「林」は一、五画目が右上がり、二、六画目が跳ねる点、三、四画目の形も似ている。「丘」は四画目を左に払うように記し、五画目をしっかり止めている点、「寺」の一画目をやや短めに右上がりにする点などが近似する。

「照」は一画目から四画目にあたる「日」の部分の形が特徴的で、一様に酷似する。すなわち、二画目は横画が一画目と離れて右上がり、縦画は長く下ろしており、四画目が右上がりである点も一致する。また、八画目の縦画に入るところの止めと終筆までの角度や、連火の部分である一〇画目から一三画目の傾きもよく似ている。「山」の字は、特に一画目が太くまっすぐな点が類似している。これらの署名は、元瑤の《法華経普門品第二五》(図24)や《法華経普門品》(図25)という、宝永期の作例で、来歴が確かな作例とも書体を共通させる。以上のことから、三点は元瑤の筆跡と見なされる。

印章は、清水寺本は「元瑤之印」一顆のみが捺されており、祥雲寺本、遊行寺本の落款部分、浄光寺本は共通して「庄頼」朱文入隅長方印・中に昇り龍降り龍と「元瑤之印」白文方印の二顆が捺されている。清水寺本は、署名においても「謹畫」と他の作例にはない語句を用いており、「元瑤之印」一顆のみであることも併せ考えると、やはりこの種の「観音図」では初期の作例である可能性が指摘できる。

おわりに

照山元瑤による一連の「観音図」の実見調査を通じて、図様や落款の

特徴、作品に付随する史料を検討することにより、いずれも由緒ある寺院に納められた四点の作例の制作時期や背景等について考察を行ってきた。これらの作例は元禄一四年(一七〇一)一月から宝永三年(一七〇六)、元瑤六七歳頃から七三歳頃に描かれたことが推察されたほか、元となった林丘寺伝来の《観音像》も元禄一四年(一七〇一)一月以前に制作されていたことが明らかとなった。また、従来取り上げられることのなかった「観音図」を介しての元瑤と上人たちとの交流等も提示することができた。

今回は調査報告が主となったが、今後はこれらの制作年や伝来の経緯がいっそう確かな史料を見つけるほか、同形式の「観音図」をより多く見い出していきたい。

註

1 元瑤に関する主な先行研究は、中世日本研究所ほか編『皇女たちの信仰と御所文化 尼門跡寺院の世界』産経新聞社、二〇〇九年。門脇むつみ「第三章 後水尾天皇時代の宮廷絵画 描く天皇、皇族と画壇」『天皇の美術史四 雅の近世、花開く宮廷絵画 江戸時代前期』吉川弘文館、二〇一七年、一五五―二二六頁などが挙げられる。

2 パトリシア・フィスター「文智尼と元瑤尼の「観音図」―唐本観音図の受容をめぐる―」山折哲雄編『白鳳叢書I 国際人間学入門 白鳳女子短期大学』春風社、二〇〇〇年三月、二三四―二三六頁。なお、元瑤筆の同種の「観音図」が「呉道子様」であることは、元瑤自賛《観音図》(遊行寺宝物館蔵)の作品解説において有賀祥隆氏により指摘されてきた。藤沢市史編さん委員会編『藤沢市史 第七巻 文化遺産・民俗編』藤沢市役

所、一九八〇年、六一―六三頁、『遊行寺宝物展 図録』敦賀市立博物館、一九九四年、五頁。

3 京都国立博物館編『京都国立博物館蔵品図版目録 絵画編 日本(江戸時代以降)』便利堂、一九九〇年、一三六―一三七頁。

4 これらの作例について、例えば浄光寺本と祥雲寺本が同図様であることなども指摘されてきた。栗東歴史民俗博物館編、発行『企画展 近江と黄檗宗の美術』一九九二年、八二頁。

5 錦織亮介「渡来黄檗僧独湛性瑩とその絵画」長崎歴史文化博物館編、発行『長崎歴史文化博物館 研究紀要 第一〇号』二〇一六年三月、口絵(図八二)。

6 その後、宝永二年(一七〇五)二月一三日に成就院の隠居所・宝珠院に退隠。清水寺史編纂委員会編『清水寺史 第二巻 通史(下)』音羽山清水寺、一九九七年、四六―四七頁、『清水寺史 第三巻 史料』二〇〇〇年、四一頁。

7 途中、欠ける部分はあるが元禄七年(一六九四)から文久四年(一八六四)までの約一七〇年分が冊子の形状で二一〇冊残る。元禄期は藤林孫九郎兼定なる人物が執筆。清水寺史編纂委員会編『清水寺 成就院日記 第一巻』音羽山清水寺、二〇一五年、四一―四四頁。

8 現時点では未刊部分である『成就院日記』の同日の条は以下のとおり。

四月廿五日

掘出観音開帳ニ付靈宝之覚

(略)

一、観音之像 林丘寺宮御筆

(略)

右之通写真置申候、以上

なお、清水寺学芸員・坂井輝久先生、同寺執事補・大西晶允様には寿清

上人や『成就院日記』のほか、清水寺、成就院の歴史等についてご教示を賜り、資料もご提供いただいた。

9 京都新聞 web サイト <https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/6976> (二〇二〇年一月一七日閲覧)

10 坂井輝久先生、大西晶允様のご教示による。

11 鏑木有子「光子内親王の作品について―林丘寺蔵掛花図屏風を中心に―」早稲田大学美術史学会編、発行『美術史研究』第二〇冊、一九八三年三月、六〇―六五頁、神戸市立博物館編『隠元禪師と黄檗宗の絵画展』神戸市スポーツ教育公社、一九九一年、七五、一一八頁、前掲註1門脇氏著書一七九―一八一頁にも解説される。

12 前掲註1門脇氏著書一七九頁。

13 前掲註2藤沢市史編さん委員会編書、敦賀市立博物館図録。

14 大本一冊、写本、二七・一×一八・九cm、全八二丁。延宝元年(一六七三)一月一日「忘筌先生詩集叙」(元瑤四〇歳、守拙齊四一歳)から、正徳二年(一七二二)二月「大雲院募縁引」(元瑤七九歳、守拙齊八〇歳)までが記される。

15 称宜田修然、高野修『白金叢書 遊行・藤沢歴代上人史―時宗七百年史―』松秀寺、一九八九年、一三九―一四一頁、時宗教学研究所編『時宗入門』時宗事務所、一九九七年、二〇三頁。両資料は遊行寺宝物館館長・遠山元浩先生よりご提供いただいた。

16 前掲註15称宜田氏、高野氏著書一三九頁。

17 前掲註15称宜田氏、高野氏著書一四〇頁。日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成(第三期)一三』吉川弘文館、一九七七年、五〇六頁。

18 前掲註4九、七九頁。

19 滋賀県日野町教育会編、発行『近江日野町志』一九三〇年(臨川書店、一九七二年復刻)、三三二頁。

- 20 「国訳一山国師語録」国訳禅宗叢書刊行会編『国訳禅宗叢書』二輯三卷、第一書房、一九七四年、四八一頁。
- 21 竹内加奈「近衛基熙書状について」同志社大学歴史資料館編、発行『同志社大学歴史資料館報』第一六号、二〇一三年一〇月、一二頁。
- 22 大槻幹郎、加藤正俊、林雪光編著『黄檗文化人名辞典』思文閣出版、一九八八年、一二六―一二七頁。
- 23 前掲註19三二二頁、前掲註4三七、八二頁。
- 24 国文学研究資料館編『陽明文庫王朝和歌集影』勉誠出版株式会社、二〇一二年、七〇頁。浄光寺本の賛における近衛基熙の筆跡については、公益財団法人陽明文庫 文庫長・名和修先生よりご指導を賜りました。心より御礼申し上げます。
- 25 平凡社教育産業センター企画編集『書の日本史 第六卷 江戸』平凡社、一九七五年、一五六―一五七頁。
- 26 小野真由美「近衛家と典薬頭・錦小路頼庸―その日記にみえる絵事について―」東京国立博物館編、発行『MUSEUM』第六四六号、二〇一三年一〇月、口絵、三四頁。
- 27 知念理「〈研究資料〉近世やまと絵作品における公家らによる詞書等の資料的検討(1)土佐光起筆「大寺縁起」(開口神社蔵)」大阪市立美術館編、発行『大阪市立美術館紀要』一九、二〇一九年三月、四一頁。
- 28 前掲註24七一頁。
- 29 陽明文庫デジタルアーカイブ <http://ymbk.sakura.ne.jp/ymbkda/index.htm> (二〇二〇年一〇月一七日閲覧)、財団法人陽明文庫編『陽明叢書国書篇 第五輯 中古和歌集』思文閣、一九七六年、一一九頁。
- 30 小松茂美編『日本書蹟大鑑』第二二卷、講談社、一九八〇年、六頁。
- 31 『近江蒲生郡志』滋賀県蒲生郡役所、一九二二年、六五八頁。

付記

本稿の執筆にあたり、清水寺、祥雲寺、遊行寺宝物館、浄光寺、正明寺、地安寺、福岡大学図書館、公益財団法人陽明文庫の方々にご高配を賜りました。ここに記して深謝申し上げます。また、ご協力、ご助言を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。なお、本稿は科学研究費助成事業・若手研究「17世紀の女性画家・照山元瑤に関する基礎研究」(18K12243、二〇一八―二〇二一年)の成果の一部です。

図版典拠

図1 中世日本研究所ほか編『皇女たちの信仰と御所文化 尼門跡寺院の世界』産経新聞社、二〇〇九年、一六三頁。

図2 21、23―25 執筆者撮影

図22 国文学研究資料館編『陽明文庫王朝和歌集影』勉誠出版株式会社、二〇一二年、七〇―七二頁。

・平凡社教育産業センター企画編集『書の日本史 第六卷 江戸』平凡社、一九七五年、一五六―一五七頁。

・小野真由美「近衛家と典薬頭・錦小路頼庸―その日記にみえる絵事について―」東京国立博物館編、発行『MUSEUM』第六四六号、二〇一三年一〇月、口絵。

・財団法人陽明文庫編『陽明叢書国書篇 第五輯 中古和歌集』思文閣、一九七六年、一一九頁。

・小松茂美編『日本書蹟大鑑』第二二卷、講談社、一九八〇年、六頁。

